

---

# 逢魔時

黒木露火

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

逢魔時

### 【Nコード】

N3651D

### 【作者名】

黒木露火

### 【あらすじ】

ある日の夕暮れ、どうも飼った猫の様子がおかしい。時刻はちょうど逢魔時<sup>おっまがとき</sup>。不吉な予感に包まれた住人は怖れおののくが……。

黄昏をいふ  
百魅ひやくみの生なずる時ときなり  
世俗せぞくしやうじ小児せうにを外そとに出いだすことを禁いましむ

鳥山石燕『今昔画図続百鬼』より

\*\*\*\*\*

「逢魔時あうまがとき」は「逢魔ケ刻」「大禍時おおまがとき」とも書く。

石燕せきえんの『今昔画図続百鬼』は、簡単な解説文のついた妖怪画集で、江戸中期に刊行された。

薄暮はくぼに沈む民家や寺院の左手に、大きな夕日が落ちていこうとしている。

その上にたなびく雲は、もう人の世界のものではない。妖怪の姿に変わっている。

『今昔画図続百鬼』の「逢魔時」の項に描かれているのは、そんな風景である。

古来より、夕暮れ時は、魑魅魍魎ちみせうりょうが跋扈はつこし始める、または不吉なことが起こる時間帯とされた。

それは必ずしも迷信の世界の話というわけではない。

警視庁のサイトで確認すると、平成18年度で交通事故が一番多かったのは16〜20時の時間帯、まさに「逢魔時」である。

逢魔時

\*\*\*\*\*

土曜日のことだ。

この時期は仕事もわりあい暇で定時には上がれるので、秋の日が暮れる頃には帰り着く。

ワンルームマンションの玄関を開けると、まず猫の姿を探す。

頭は黒や虎柄などの濃い色、鼻づらは白と、額のところで八の字のように毛色の分かれているのを「ハチワレ」という。猫にはよくある柄だ。

白黒のハチワレ猫の小次郎は、腹が減っているときや、おそろくさびしいときにも出迎えてくれる。そうでないときはクローゼットの中や主がいなくなったあとの毛布の上で寝くたれているか、カーテンと窓の間にもぐり込んで外を監視している。

ベランダの手すりに窓越しでからかうように出没するハトから、この家を警備守護することが彼の任務なのである。その証拠に、他の部屋のベランダは鳩の糞で白く汚されているのに、うちにはほとんど被害がない。

猫なんて何も役には立たないなどと言うなかれ。ああ見えて、立派に働いているのである。

玄関を入ると、二メートルほどの短い廊下の両側にトイレ、風呂、小さいキッチン、奥がクローゼット付の居室という、典型的な単身者向けのマンションになっている。当然、ペットは禁止である。

近隣の人間にはひよっとしたらバレーしているかもしれないが、ここに引っ越してきて三年、毎朝のように顔を合わす管理人から苦情がきたことはない。

その日帰り着くと、本を日焼けから守るために引きっぱなしにしているカーテンのせいで、部屋の中はもう薄暗かった。ドアの外は西日でまだ明るかったのに。

入口であかりをつけると、寝床の毛布の上で寝たまま横着にのびをする小次郎が見えた。まったく、今日は出迎えにくる気はないと

みえる。

それでも「ただいまー」と声をかけ、エサや水を補給をしつつ部屋の中に入っていった。毛布の上ではまだ小次郎が伸びたまま横たわって私を見上げている。抱き上げてほおずりをすると、のどをゴロゴロと鳴らした。

ふれあいタイムがひとしきり終わると、あとはそれぞれ勝手に過ごす。

人はご飯を作って食べたり、本を読んだり、ネットを徘徊したり。猫はエサを食べたり、遊んだり、また寝たり。

とりあえず、作りおきの菜があるから、今日の夕食はとりたてで作る必要はない。

見えない映画のDVDは「ディパーテッド」と「眼下の敵」の本だけ。

読んでない本は山積み。

久しぶりに映画の予定のない週末、さて何から手をつけようかと座ったままぼんやりと考えていた。

その時。

小次郎が窓のほうに向かって、威嚇するようになり声をあげていることに気づいた。

ハトだろうか？

窓は網戸のまま開けっ放し。

いつの間にか日は暮れたらしく、ぴたりと閉じたままのカーテンの外は暗い気配がする。

耳をすましても、ハトの羽ばたきもくるくるという転がすような鳴き声も聞こえない。

ハトが飛んでくるのは明るいうちだけだし、だいたいこんなふうに背中を逆立てるのはおかしい。ハトが相手のときは腰の浮いた、もつと興味津々ワクワクドキドキな感じで窓にかじりつくのが常だ。

小次郎は低くうなり続けている。

……ひよつとして、窓の外に、カーテンの外に何かいるんですか、小次郎さん？

三年前に里親探しの会からもらってきて以来、こんなふうになるのは初めてだ。というより、猫を飼って二十数年、こんな経験は初めてだ。

飼い主がさんざん恐怖体験の本を読んだり心霊系サイトをながめたりしても、いつも猫たちは近くでリラックスしていた。だから私もいつも落ち着いて、のほほんとしていられたのだが。

時計を見ると六時すぎ。ちょうど逢魔時。古来より、魔が出現しはじめる不吉な時間とされている。

小次郎がうなりはじめてから五分ほど経っていた。

靈感もなく陰陽師でもない私は結界など張っているわけでもないし、信心深いわけでもないのでおまもりのたぐいも身につけてはいない。窓の外に目に見えない何かがあったとして、それが侵入を試みたなら、靈的に無防備なこの部屋に入ってこれないはずがないのだ。しかし、小次郎のようすを見る限りでは、対象は未だ窓の外。ベランダか、その向こうの空間のどちらかにいるらしい。

だとすると、それはまだ部屋には入ってきていないし、入ってこようともしていないのだろう。

だったらほつときゃそのうちいなくなるかも。

空腹を憶えた私は、とりあえず夕食をとることにした。

少し塩を入れすぎたなあ、などと思いながら完食して皿を置くと、私の背に身体をつけるようにして小次郎は静かにうずくまっていた。後ろ向きのままなでようと伸ばした指に、逆立った背中の中の毛が触れた。と同時に小次郎はまたうなりはじめた。

振り返って見ると、やはりカーテンの閉まった窓のほうを向いて座ったままの姿勢で威嚇している。

……ひよつとして、まだいるんですか、小次郎さん？

そのとき私の脳裏をよぎったのは霊ではなく、網戸に貼りつくように立っている見知らぬ男の映像。同時に、ベッドの下に潜む鎌男

などの犯罪者潜伏系の都市伝説が頭の中をぐるぐるまわりはじめた。心霊ネタは好きだが、実際は死んだ人間より生きてる人間のほうがフィジカルな実害を与えうるといふ点ですつと怖い。

右隣の住人はまだ帰ってきていないらしく、いつも聞こえてくるテレビの音声も聞こえない。

左隣の住人はいるのかいないのかわからないくらいいつも静かだが、この時間だ。おそらくまだ帰っていないだろう。帰ってきたとき、管理人はもういなかった。

このマンションは繁華街近くにある单身者向けなので元気で遊びざかりの学生や社会人が多く、こんな時間に在宅している人はあまりいないのだ。

うわー。どうしよう。

嫌な気分がしたけれど、小次郎が座ったままの姿勢だということ、相手に対して気持ち的に優位に立っているのは間違いない。人間が一緒に強気になっているだけの可能性があるにしろ。いずれにしても手に負えないほど凶悪な敵ではないということなのか。

とりあえず、なんかあってもエレベーターか階段まで逃げればなんとかなるか。

それにあのカーテンの向こうに、目に見える誰かがいても、目に見えない何かがいっても、こちららホラー書きのはしくれ。ネタにしてやる！

思い切ってカーテンをめくった。

……誰もいない。

背後で小次郎のうなり声が高くなる。

やっぱりいるんだな、と背筋が冷えた。

死んでるほうだったのか。

幽霊なんか実際見たことないから見えたらどんなに参考になるだろう。

でも、見えないんじゃない仕方がない。

少しがっかりしつつ、ふと右下に視線を落とすと、そこにいた。

右隣との仕切り板の、下の隙間から頭をのぞかせていた。頭から背中にかけて紅茶を含ませた筆で一捌けしたような、白い雑種のオス猫が。

しゃがみ込んで、おいでと言うとおどおどしながらも近寄ってきた。知らない人間を見ると隠れてしまい、何度か遊びに来たことのある友人にいまだに姿を見せたことのない小次郎とはえらい違いだ。その小次郎は背後でうなり続けている。

そういえば数日前の朝、信頼している相手に甘えながら何かを訴えるような成猫の鳴き声がどこかからしていた。その時は、近くにある一戸建てか他のマンションから聞こえてくるのだろうと思っていたのだが。

同じ階だったとはね。

白猫の頭を軽くなでてやりながら、私はため息をついた。

終

(後書き)

実話です。

猫一匹にびびりまくったのが悔しかったので、ネタにしてみました。  
こんなオチですみません。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3651d/>

---

逢魔時

2009年3月24日10時09分発行